

論文の内容の要旨

論文題目 近代日本における資本主義と習俗の交錯
東京・日比谷から見通された土地と社会
氏名 平井太郎

この論文は、近代日本を対象として、資本主義とともにある生のかたちをめぐる問題の構成と、現在まで射程に収める、その歴史的な展開の論理を探究したものである。

「資本主義とともにある生のかたち」とは、かつて、M・ウェーバーによって、人間の必要に裏づけられない、利潤を目的とした生と、定式化されていた。ここでは、まず、この問題設定について、これまで関係づけられることの少なかった二つの理論から、再考を試みた。

一つは、M・フーコーの主体化をめぐる議論である。この議論を、ここでは、資本主義のエートスを「主体化の論理」として、より一般的に位置づけなおすとともに、宗教といった社会制度を前提としない、現実構成にかかわる「技術」、主体化をめぐる「規律化」という技術の効果に注目する視座として捉え返した。さらに、この技術という視点を踏まえ、主体化の論理では、資本主義とともにある生が、二重の自己という基準の重層性にしがたって、たえず反省と再構成を重ねる「問題構成＝問題化」の過程にあると位置づけた。

次に、第二の理論として、J・ボードリヤールを軸とする消費社会論との接合を図った。この議論では、機械から労務管理、また、広告までをふくむ、広い意味での「複製技術」の働きを重視することで、主体化の論理が擬装され、相対化されてゆく、歴史的な過程が視野に収められていた。このように、西欧近代をモデルとしたとき、資本主義とともにある生のかたちをめぐる問題は、問題構成の軸には主体化の論理があり、その展開は、規律化の技術と複製技術という、二つの技術の効果によって促されていると結論づけた。

そのうえで、こうした西欧近代のモデルの、根本的な隘路を指摘した。すなわち、主体化の論理では、はじめにあった「人間の必要の相対化」という問題設定が、この論理が「人間」の再構成を図るものである以上、十分に掘り下げられない、という隘路である。ここでは、このような隘路が生じる背景に、主体化の論理をめぐる、その生成を促す規律化の技術から、その相対化をもたらす複製技術へとむかう、歴史的な過程が介在していると考え、これら二つの技術が、ほぼ並行して展開した近代日本に注目して、西欧近代では顕在化しえなかった、資本主義とともにある生のかたち接近することとした。

そこで、まず、西欧近代をめぐる議論の、いずれにおいても注意されながら、二次的なものとして棄却されていた、「習俗の論理」に焦点を絞った。ここでは、資本主義とともにある生をかたどる論理という問題設定にしたがい、習俗を、「過去との照らし合わせをとおして現在が同定される論理」と定義し、主体化の論理と同様、習俗の論理にも、二つの時点というかたちで、生をかたどる基準が重層化していると捉え返した。

次に、近代日本で生のかたちが規定される際の「家」の重要性と、そこで、習俗と呼ぶべき論理が働いていた事実を再確認したうえで、柳田國男の所論によりながら、家の習俗における照合の根拠が、家と結びつく「富」と「土地」にあることを明らかにした。さらに、この知見を踏まえ、資本主義がたえざる富の異動をとまなう以上、本質的な根拠は土地にあったと仮説立てた。この仮説は、土地と人間の生を関係づける発想が広がったとき、資本主義とともにある生のかたちとして、近代日本における習俗の論理が現実味を帯びてきた、と言い換えることができる。

柳田の議論では、こうした習俗の論理について、「人間の忘れやすさ」を先験的なモメントとして、過去と現在とがたえず照合され、再構成される、超歴史的な問題化の過程が想定されていた。これに対して、ここでは、「人間の忘れやすさ」もまた、規律化の技術や複製技術との相関において捉えられるべきだとすると同時に、同じように、富や土地についても、そのイメージが、これらの技術の働きによって構成されてきたのではないかと、こうした一連の歴史的な過程の解明を、この論文の問題の所在として位置づけた。

なお、このような意図にもとづいて、東京・日比谷で生じた出来事を分析の起点とする、「定点観測」を方法論として取り入れた。そこには、まず、定点を置くことによって、習俗の論理の焦点となっている土地について、イメージの水準で問題にしやすくなるという、一般的な配慮がある。さらに、東京・日比谷には、この研究に固有の戦略的な価値がある。すなわち、埋立地や「首都」の中心としての来歴から、規律化の技術や複製技術の働きが相対的に強く、したがって、ここで問おうとしている、資本主義とともにある生としての、習俗の論理を「兆候的に」探り出すうえで相応しいと考えたのである。

以上の問題設定にもとづき、次のように具体的な分析を行なった。まず、二〇世紀への転換期を対象として、習俗と二つの技術とが交錯する基本的な構図を探った。次に、その後の三つの画期において、この基本的な構図の転換とその可能性を明るみに出した。

はじめに、習俗と二つの技術が交錯する基本的な構図については、東京・日比谷における、神宮の東京遷宮と伊勢信仰の変質、練兵場における訓練と祭礼、そして、日比谷焼打ち事件をとりまくメディア・社会環境を手がかりとして分析を行なった。

その結果、第一に、習俗そのものに歴史的な厚みが感覚され、過去と現在との照合に、現実味を与えていたと結論づけた。同時に、習俗には、そのかけがえのなさの感覚が、現在と過去との乖離に対する敏感さと、それゆえの、過去をめぐる真偽の定めがたさの感覚を生じさせることによって、いっそう亢進してゆく機制があることを指摘した。ここでは習俗を、そのように、土地に触発される過去を基準とした、反復的な反省をとおして、生のあり方に「動的な同一性」が与えられてゆく、

資本主義とともにある生であると捉え返した。

第二に、こうした、反復的な反省という側面において、習俗は、規律化の技術と共通点を持ち、この移入された技術が喚起する未知なる現象が、習俗をとおして了解できなくなかったと結論した。その現象とは、フーコーが注意を促していた、規律化の技術における規格にしたがった「雑多な群集」の発見である。同時に、この技術で志向される斉一化の局面もまた、習俗と関係づけられる脈絡を見出した。なぜなら、規律化の技術がもたらす、内面をもった主体という生のかたちも、習俗における反省の反復過程に組み込まれるからである。そこで、ここでは、近代日本において、習俗は、主体化の代替とも代償ともなるものでもなく、主体化の先に見通されていた、人間の同一性の問題が二次的であるかのような感覚をともなった生が、すでに兆しはじめていたと展望した。

第三に、W・ベンヤミンの所論にしたがって、複製技術の効果が、習俗を喚起するうえで、両義的に働く点に注目した。それは、「慣れ」というかたちで、まさに現在に立脚した習俗への転換を促すからである。だが、同時に、複製技術は、過去と現在との照合に、際限なく拍車をかける。それによるイメージの飽和は、過去や土地を動かさざるべき実体として感じさせ、その喪失こそが問題であるかのような視野の狭さを生む一方で、過去や土地が、生のあり方を見定めるうえで、選択肢の一つにすぎないという感覚がもたらされもする。したがって、ここでは、見出されたばかりの習俗の動態性が、こうした過程をとおして「平板化」される危険にも、つねにさらされていると結論づけた。

次に、こうした基本的な構図が、いかなる転換の可能性に開かれ、またそれが閉ざされていったかを分析した。そこでは、家と家庭、また、それらの残余としての個という、三つの生のかたちに焦点を定める意図から、東京・日比谷における、次の三つの出来事を注目した。すなわち、二〇世紀初頭における神前結婚と財閥家族の出現と浸透、昭和モダニズム期における建築・都市環境の変貌、そして、高度経済成長期における消費社会変容の兆候である。

結果として、第一に、G・ジンメル の貨幣論を踏まえ、富と土地とによって規定される家という習俗には、この時期に形成された都市家族や財閥家族ばかりでなく、資本市場に直接に位置づく「金融家」や、所有する土地に「責任」の観念をもつ「土地貴族」へと転回する可能性が開かれていたと結論づけた。同時に、ここでは、このような可能性が、日本社会においては、土地をめぐる、国土という観念が前提とされつづける一方で、責任の観念が稀薄化しているため、現代もなお、十分に展開しえていないと展望した。

第二に、習俗の論理の平板化にとともに現われた家庭では、家に見出せた可能性が、あらかじめ摘み取られている点に注意を促した。そして、その兆候を、家の根柢にあった「死」や、家庭という営みの核心にある「性」をめぐる、ある種の禁忌や平板化に見てとった。言わば、習俗がもたらさうる安逸と閉塞を、消費社会におけるコンフォルミズム(自己肯定)の論理に引き付け、今日的な問題として位置づけなおしたのである。

第三に、家や家庭が閉塞にむかうのに対し、既成の人間や世界の捉え方を根柢的に乗り越える生のかたちとして、個を見出した。ここでは、個を、高度経済成長期の現実性を手がかりとして、「保証のない信憑を生きること」と捉え直した。それは、自らの同一性が問題でないかのように振る舞う、言わば、同一性をめぐる問題化の構図の「外」に出る、生のかたちである。こうした生のかたちは、習俗においても、土地や過去による根柢づけを、切り上げることなく遡及させ、ニヒリズムとは異なる「意味のゼロ点」の発見に到るかたちで、可能性としては開かれている。本論文は、このように、資本主義とともにある生を貫く、同一性をめぐる問題化の「外」を展望することで、結ばれている。